

地方小出版

情報誌

アクセス

毎月1回	1日発行
購読料	定価 150円 (本体 143円)
	年間 1,500円 (税込み)
振替	00120-0-19017

発行所 (株)地方・小出版流通センター
編集 アクセス編集委員会

〒162-0836 東京都新宿区南町20
TEL.03-3260-0355 FAX.03-3235-6182

地方出版に未来はあるか？

「首都懇」、手応えあった20周年記念事業

首都圏出版人懇談会 会長 星野和央

1990年の夏、当時は東京九段にあった地方小出版流通センター近くの喫茶店で川上賢一氏とかまくら春秋社の伊藤玄二郎氏、それに私の三人がコーヒーを飲んでいました。「東北や信州にもあるように、1都6県の首都圏でも出版人の集まりが出来るんじゃない。僕がリストを出すから——」と川上氏。「地方出版の群像」という毎日新聞の連載企画が終わったところのことである。この日の話が基となって同年の12月、首都圏出版人懇談会は会員15社でスタートした。

時は移り2011年6月25日、東京の神田駿河台にある明治大学紫紺館。川上氏をコーディネーターにノンフィクション作家の佐野真一氏、歴史春秋社の阿部隆一氏に私を加えた三人がパネリストとして参加し「地方出版に未来はあるか？」と題したシンポジウムが開かれた。首都懇懇足20周年の記念事業の一つである。なんと20年の歳月が流れ、私にとっても思いがけない巡り合わせとなった。

《神田駿河台に全員集合！》

という前置きのもと、本年6月の1か月間、首都圏1都7県の中で、地域に根ざす方針のもとに営む地方出版17社の全仕事を紹介するイベントが千代田区神田駿河台を中心に行われた。それは、本の街・神田のまちおこしにも繋がる「地域深耕」でもあった。

私たちの会員社は、一人あるいは数人、多くても5～6人の規模の個人商店のような会社ばかりだが、それぞれ仕事の合間に時間をつくり準備をす

すめてきた。その企画検討中に、あの東日本大震災が起きたのである。この出来事は日本人に対して様々な考えるテーマを提起してくれたし、特に地域社会における人間の在り方の見直しに



思えて仕方がない。私たちは真剣に20周年事業と向き合い、次の3本の柱を軸として取り組んだ。すなわち、①首都懇の歩みと今を示す企画展、②会員社によるブックフェア、③記念フォーラムと交流会である。

《企画展とブックフェア》

企画展は6月4日～7月10日の1か月余りにわたり、明治大学中央図書館企画展示と位置づけて、同図書館ギャラリーをお借りし、地方小出版流通センターとの共催で「関東の地方出版・全仕事——地域文化を耕す20年のあゆみとこれから」と題して実施した。首都懇20年の編年史、代表的な刊行物や出版資料を展示した会員社の紹介コーナーは圧巻であった。来場者の記帳の中には「定期的に開催されたい」

(出版社員)、「土地のすみずみまで行きわたる水脈を見るような思い」(書店人)、「記録がいかに大切か、改めて感じた」(一市民)といった反響のメッセージが寄せられ、励まされた。鈴木秀子さんをはじめ、明治大学図書館の数人のスタッフも応援していただき、心から感謝したい。

私たち出版人の本来のイベントともいえるブックフェアは6月11日(土)～7月10日(日)の1か月間、神田の三省堂本店4Fの人文コーナー特設会場で開催。題して「関東の地方出版・全仕事——首都懇17社・1000点+(プラス)」は多彩で重量感あふれるフェアとなった。

《地方出版に未来はあるか》

今回のメインイベントは6月25日(土)明治大学紫紺館(校友会館)で行われた講演会、

シンポジウム、交流会であった。遠くは宮崎県、岡山県、近くは山梨県などの同業の地方出版人をはじめ、首都圏にいる出版人、新聞人、読書人、図書館人など、いわば地域出版の応援団ともいえる150人近い参加者で会場は溢れるばかりとなった。記念講演はノンフィクション作家・佐野真一氏による「震災・地域——出版のいまと未来」のテーマで約一時間、震災直後には東北に足を踏み入れ自らの目で被災状況を記録されただけに臨場感のある熱弁であった。

ついで行われたシンポジウムは川上氏の司会のもと、佐野、阿部、星野がそれぞれの立場から地方出版人の哀歓を語った。講演会も含めて、そこで問われたのは震災も一つの原因となって明治以降に築かれた「現代集落」が消

えたとはいえる状況の中で、明日に向けてどのような地域の共同体を構築していくか、ということではないだろうか。地域を見つめ直すことに軸足を置いて活動している「地域出版」の未来は、新たな展開を呼び込む導火線になるのか——を提起されたように思う。

交流会はウエルカムドリンクと声楽家・浅香薫子さんの歌で華やかに幕を開けた。会社社の大先輩、群馬あさを社の関口ふさの氏の乾盃でスタートし、和やかな交流の輪と談笑が続く。首都懇は20年のあゆみだが、会員は

40年近い社歴を持つところも数社は存在する。東京文化圏の中で地域と向き合って出版の仕事をしている者たちに、多くの祝福と激励が会場いっぱい溢れていた。いわば「地域自立」を支える応援団の「こだま」でもあろうか。

☆ ☆ ☆

ここに、私たちの20周年の記念事業は終えた。これからの動きに対してマスメディアの反応は素早く、朝日新聞、毎日新聞、東京新聞、下野新聞な

どの日刊紙から、新文化、文化通信、アドバンスニュースの業界紙に至るまで、催しの前後に好意的な記事を掲載してくれた。

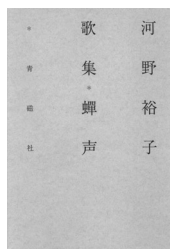
私たちのこれからの仕事を通じて「足元を見つめることで、世界が見えてくる」という誇りを確認し、関係各位のご支援に感謝を申しあげ、稿を閉じる。

(ほしの かずお／さきたま出版会
代表取締役)

新刊ダイジェスト

※価格は総額(税込)表示です。

『蟬声』 ●河野裕子著



〈子を産みしかのあかときに聞きし蟬いのち終る日にたちかえりこむ〉昨年8月、乳がんで亡くなる当日まで歌を作り続けた歌人・河野裕子。夫で歌人の永田和宏氏が病床で手帳に綴られた文字を判読、のちには聞き書きで遺歌集が誕生。雑誌や新聞などに発表されたものと合わせ、422首が収められている。命の重さと家族の絆を強く感じさせる歌は没後にも反響を呼び続けている。タイト

ルは長男・淳氏の提案ですんなりと決定。蟬の声が詠まれた歌は数首あるが、初めての出産の時の歌に呼応する象徴的な声だったと思われる。死の間際まで歌を作り続け、思いを託した歌人のメッセージが伝わって来る。

◆2800円・A5判・197頁・青磁社・京都・2011/6刊・ISBN978-4-86198-177-7

『宮沢賢治文学における地学的想像力 ―〈心象〉と〈現実〉の谷をわたる』 ●鈴木健司著

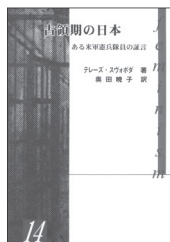


宮沢賢治は、まず科学・地学の学徒であった。人々からは「石口賢さん」と言われ、ハンマー片手に岩手一帯を歩き、地域ごとの地質の鑑別を行っていった。著者は、賢治の作品に散りばめられた地学的要素と背景を知るために、とくに「春と修羅」や「楢ノ木大学士の野宿」などの作品を例にとりあげながら、自らも山野に足を滑らせ、沢に浸り、一つ一つ岩石を採集して調べ、賢治の

足跡をたどる。その時のカラー写真が多数掲載され、本書を一層魅力的なものとしている。こうして、「(賢治の数々の地質調査体験が)作家・宮沢賢治の誕生に欠かすことのできない要因の一つになっていった」ことを明らかにしようとする。

◆2940円・A5判・269頁・蒼丘書林・東京・2011/5刊・ISBN978-4-915442-86-5

『占領期の日本 ある米軍憲兵隊員の証言』 ●テレーズ・ズヴォボダ著／奥田暁子訳



第二次大戦終了後、中野区に置かれた米軍第八営倉には、レイプや殺人を犯した日本駐留米兵が収容されていた。ここで18ヶ月間、看守として働いた著者の叔父は、退役後、事業家として財をなすが、看守の経験を本に残すことを作家である著者に切望していた。だが2004年、イラクのアブグレイブ刑務所で米軍による虐待が報道されると、うつ病にかかり突然自殺してしまう。そこか

ら、自殺の遠因が看守時代にあるのではないかと疑った著者の解明の旅が始まる。米軍関係資料を博捜し、日本にも訪れ旧第八営倉周辺の住民から聞き取りまで行う。資料は隠蔽され発見できない。戦争の正義を問うドキュメントである。

◆2100円・A5判・186頁・ひろしま女性学研究所・広島・2011/7刊・ISBN978-4-907684-30-3

売行良好書

期間：2011年8月16日～9月15日

[出荷センター扱い] ※税込み価格

- (1)『蟬声』2800円・青磁社 (2)『未来ちゃん』2100円・ナナロク社 (3)『ベターホームの家族のこんだて』1260円・ベターホーム出版局 (4)『遠野むかしばなし』1200円・熊谷印刷出版部 (5)『赤いおおかみ』2415円・古今社 (6)『美食主義者』2310円・クオン (7)『正しく怖がる放射能の話』1050円・長崎文献社 (8)『中国環境ハンドブック 2011～2012年版』2940円・蒼蒼社 (9)『昭和二十年八さいの日記』1365円・石風社 (10)『九州発 食べる地魚図鑑』3990円・南方新社 (11)『慟哭の谷』1631円・共同文化社 (12)『江戸の<長崎>ものしり帖』2205円・弦書房 (13)『よみがえれ、東日本！ 列車紀行』1680円・クラッセ (14)『ラストハンター』1890円・鉦脈社



[三省堂書店神保町本店4F—センター扱い図書] ※税込み価格

- (1)『東京かわら版 9月号』420円・東京かわら版 (2)『寄席芸人写真名鑑』1680円・東京かわら版 (3)『佐藤優のウチナー評論』1800円・琉球新報社 (4)『佐土原城』1680円・鉦脈社 (5)『戦国時代の静岡の山城』2520円・サンライズ出版 (6)『酒とつまみ 14号』400円・酒とつまみ社 (7)『甲斐小山田氏』3360円・岩田書院 (8)『改訂版 武蔵松山城主上田氏』1890円・まつやま書房 (9)『房総沖巨大地震』1050円・崙書房 (10)『会津ManMa』780円・歴史春秋社

[ジュンク堂書店新宿店—センター扱い図書] ※センター出荷データより/税込み価格

- (1)『酒とつまみ 第14号』400円・酒とつまみ社 (2)『昭和プロレスマガジン 24』1000円・昭和プロレス研究室 (3)『“距離”のノート』210円・暗黒通信団 (4)『未来ちゃん』2100円・ナナロク社 (5)『バッタ・コオロギ・キリギリス生態図鑑』2730円・北海道大学出版会 (6)『女王様挫折記』315円・暗黒通信団 (7)『素数表150000』375円・暗黒通信団 (8)『甲斐小山田氏』3360円・岩田書院 (9)『寄席芸人写真名鑑』1680円・東京かわら版 (10)『蟬声』2800円・青磁社

以下ホームページでも各種情報提供を行っております。ご利用ください。
本と出版流通のページ：<http://neil.chips.jp/>

トピックス ——— ★★★


▼公開講座「本の一生」のお知らせ

明治大学の生涯教育機関であるリバティアアカデミーと本の街神保町を元気にする会が、「本の一生 一本の街・神保町で考える」と題して公開講座を共同開催することとなりました。会場は明治大学駿河台キャンパス アカデミーコモン11F。開催日時は10/8～12/17の各土曜日13:00～14:30。受講料は全6回6000円で、この他に、初めての方はリバティアアカデミー入会金3000円が必要になるようです。詳細は、URL <https://academy.meijijp/TEL03-3296-4423> FAX03-3296-4542 明治大学リバティアアカデミーまで。内容は「人はなぜ本を読むのか—読者の存在、読者としての学生」(講師/土屋恵一郎氏・明治大学法文学部教授)「本の企画はどうたてられるのか—発想法」(講師/鷲尾賢也氏・評論家)「本はどのようにしてつくられるのか—装幀・印刷・製本」(講師/広岡克己氏・小学館専務取締役)「本はどのように流れ、売られていくのか—取次から書店、店頭、購読者まで」(講師/関根正之氏・元講談社取締役)「本はどのように第二の人生を過ごすのか—古書という森、本の街神保町の成り立ち」(講師/八木壮一氏・八木書店社長)「本の未来はどうなっていくのか—状況と展望をめぐってパネルディスカッション」等々。

郵便販売のご注文方法

- ◎お名前、お届け先(郵便番号、住所)、連絡先お電話番号、ご注文品の書誌名、冊数の必要事項を明記のうえ、下記までFAXでご連絡ください。
 - ◎送料は、冊子小包・メール便共実費でお送りさせていただきます。基本的にはメール便は、一冊210円でお送り致します。(メール便の到着は、発送してから3～4日かかります。)お急ぎの方、その他ご要望がございます場合はお気軽に下記までお問い合わせ下さいませ。
 - ◎なお書籍お買上総計(税抜き価格)が5,000円以上の場合は、送料をサービスさせていただきます。
- ★地方・小出版流通センター
FAX：03-3235-6182

地方・小出版物のデータになります。綴じて保存してください。



三省堂書店

BOOKS SANSEIDO

神保町本店 4階
地方出版・小出版物フロア

営業時間 10:00 AM～8:00 PM
〒101-0051 東京都千代田区神保町1-1
TEL. 03-3233-3312(代)
URL. <http://www.books-sanseido.co.jp>

**営業の
ごあんない**

本店4階売場では、地方・小出版流通センター扱いの新刊全点のほか、地域別に書籍を取り揃えております。また、地域ならではのタウン誌、趣味の雑誌も扱っております。

